

Ⅲ. 「ひびき合う 三の丸の子どもたち」をめざして①

～学校教育全体での取り組み～

1. 「ひびき合う」とは何か？

三の丸小学校では、児童や地域の実態を鑑み、学校のグランドデザインのもと、「ひびき合う 三の丸の子どもたち」という合言葉で学校教育目標の実現をめざしている。「ひびき合う」は、単に「関わり合う」のではなく、「伝え合う」でもない。「ひびき合う」とは、どんなことなのかを、以下のように定義づけている。

- ・ みんなで関わり合いながら、よりよいものをめざし、
よりよいものを築き上げていく姿。
- ・ 目に見える、または目に見えないけれど、
単元のねらいにより近づく心の変容「強化」「変化」「統合」

- ・ 「強化」とは、友だちとの関わりを通して「やっぱりこれでいいんだ。」
「だからこれでいいんだ。」と、根拠をもって考えがより強化されることである。
- ・ 「変化」とは、友だちとの関わりを通して「こうだったけれど、違う考えになった。」など、これまでの考えとは変化することである。
- ・ 「統合」とは、自分の考えと友だちの考えとを合わせて、新たな考えを作り出すことである。

2. カリキュラム全体で育む「ひびき合う 三の丸の子どもたち」

本校では、教育活動全体を通して上述のような「ひびき合う姿」をめざして取り組んでいる。授業で培ったものを学校生活でも生かす場があったり、学校生活とつながって授業で培われる育ちがあったりするからである。

いろいろな場面で「ひびき合う姿」が見られるように育てているが、主に特徴的なものは以下の3つである。

- ① 三の丸の5月の朝会
～「ひびき合う姿」を子どもたちと共にめざすために～

子どもと教師が、「どんな学校を創っていくのか」について共に考え、同じ方向をめざすために、5月の朝会で、子どもたちと共通理解の場をもっている。そこで、昨年度までの子どもたちの姿をスライドに映しながら、「こんな学校にできたらいいね。」と語りかけ、合い言葉「ひびき合う 三の丸小学校」を大切にしていこうとしている。(スライド一部 右参照)



5月の朝会の後、学級活動や学習場面・行事などを、教師と子どもたちとで、ひびき合いながら作り上げていくことになるのである。

② 三の丸の運動会 ～異学年で「ひびき合って創る運動会」～



大玉転がし 作戦を話し合う姿

みんなで作戦を話し合った時には、「2年生の子がアイデアを出してくれた。」とうれしそうな6年生がいた。6年生が話し合いを進め、それを5年生がフォローする姿も自然に生まれていた。それは、チームで勝つために必要だったからだろう。運動会で勝つために、子どもたちは自然に話し合い、練習試合をしたり、小グループに分かれて作戦を練ったりと、関わり合い、ひびき合っていた。

本校では、毎年5月末に運動会を行っている。特色としてあげられるのは2点である。

1点目は、すべての団体の得点種目が、異学年集団である「なかよし班」で行っていることである。「**なかよし6（シックス）**」とよばれ、18の班が3色対抗で行う。各色6班あるなかよし班が、6競技のいずれかに出場し、なかよし班ごとの対戦となる。

この形にすることで、各学年の子どもたちが自分のできることを考え、子ども同士で悩み、考え話し合う姿が見られるようになる。み



着せ替えリレー 喜び合う姿



運動会実行委員の話し合い

2点目は、運動会実行委員で、なかよし班種目そのものを提案、実行していくことである。「ひびき合う」ことのできる「種目」にすることはとても難しいが、休み時間も集まって、話し合う姿が見られた。また、練習日程や応援練習などのことも、教師と共に相談しながら進めている。実行委員の子どもたち同士もひびき合いながら、運動会を創りあげ、達成感を味わっている。

それぞれの子どもたちが、自分たちにできることを考えて、話し合い、1つのものを創り出しながら、互いに高まっていくことができる場面の効果は大きい。年上の人話し方や聞き方に出会うだけでも「ひびき合い」につながる素地を培っているともいえる。

③ 三の丸の「わくわくハイク」～異学年で「ひびき合って創る遠足」～

秋になると、「わくわくハイク」という先述の「なかよし班」を単位とした遠足を行っている。今年も行うのか、行わないのか、というところの議論から、6年生を中心に行事を立ち上げる。さらに、本校の「わくわくハイク」は、班ごとに行き先を決め、出かけるのが特徴である。出発と解散のみ全校で行うがその他の行程は班ごとに異なる。バスや電車を利用しながら、市外にも出かける班もいくつかある。

7月から6年生を中心に、行き先や準備の活動をし、それぞれの班のオリジナルのハイキン

グを実現させる。「わくわくハイク」という行事に向かって、一人ひとりの意見が反映されたり、合意形成の上で活動内容や準備物が決まったりするので、異学年での「ひびき合い」を可能にする場面がたくさんある。例えば、ある班では、わくわくハイクにもっていく旗の相談をしていた。「どうする?」「わたし、色を塗りたい!」「ぼく、テントウムシを書きたいな。」「まず班の名前を書こうよ。」「目立つように大きく書こう。」と言葉が飛び交い、下学年の子が手を出せないようなら、「ここ書く?」と上の学年が声をかける。2時間後にはカラフルで、楽しい旗ができあがっていた。

また、ある班では、班でおそろいの缶バッジを作り、当日みんなでそのバッジをつけて出かけた。当日までの活動では、いろいろなアイデアが出され、缶バッジまで絞り込むのに時間がかかったり、バッジの材料が足りなくなってどうするかを考えたりし、頑張ってみんなで問題を解決してきた。その結果満足を得られるものができあがり、当日楽しく出かけることができたのである。



持って行く旗について相談する姿

6年生が中心となって子どもたちが自ら創り上げる「わくわくハイク」は、自分たちで計画し、活動していく中で、異学年と交流し、各学年の児童が主体的に取り組み、自分たちで楽しくやり遂げる経験となり、様々な学習や活動への意欲付けにもなっている。その実感が教師の方にあるからこそ、この活動が10年以上も続く本校の伝統行事になっているのであろう。

このように、行事などを中心とし、学校全体でも「ひびき合う」ことをめざして、取り組んできている。授業の一部分だけで「ひびき合おう」としても、それはなかなか難しいことである。子どもが主役の学校であり、そのベースに立って、教師と子どもが同じ方向に向かって歩むことが、子どもと共に創る「ひびき合う」授業への土台づくりに欠かせないと思う。

3. 「ひびき合う 三の丸の子どもたち」を育む学級経営

子どもたちが「ひびき合う」ように育つかどうかは、学級の雰囲気や学級で繰り返されている学習習慣など、学級経営が大きく関係してくる。例えば、友達同士関わり合って楽しく関係が築かれていないところに、共に力を合わせてみんなで懸命に問題解決をする場面は生まれにくい。「聞く・話す」習慣ができていないクラスで、友達の話から自分の考えを変化させたり、深めたりはできないのである。本校では、「こうすれば、子どもはこう理解する」といった教師に主眼を置いた方法論的な研究ではなく、子ども一人ひとりに主眼をおき、子どもがクラスの中で個性を生かし、思考を最大限に働かせて問題に向き合う子どもの姿をめざし、「ひびき合い」を実現させようとしている。「その子」がどのような考えをもったのか、友達からどん

なことを受け取り、変容したのか、そうしたことを授業の中でみとり、子ども同士をつないでいかなければならない。つまり、子どもの内側から「ひとりでは無理だけれど協力して、問題解決をしたい。」「みんなはどう考えているのかを知りたい。」「話し合いたい。」と思えるクラスになっていなければ、子どもは「ひびき合わない」し、教師がそれをつなぐことはできないのである。そう思えるような関係が築けているかどうか、「ひびき合う」ための土台の部分をしっかりと培っているのかどうか、普段から研究の対象としている。そのための「学級経営検討会」を年間3回行い、互いにクラスを開いて、土台の部分について積極的に助言し合ったり、質問したりしている。



どうやったらうまく動くかを共に解決し合う子たちの土台となる部分を培っているのである。

後述する研究構想図にも書いてある通り、台形の部分が学級経営の中で培いたいものである。特に研究と深く関係する部分がかかれている。子どもの名前を出しながらどのような方法で習慣をつけることができるか、またどのような場面で経験を積んでいくか、などを検討している。特に、若手の教師にとっては、学級経営の技能の向上は必須である。たくさんの引き出しをもつ経験を積んだ教員との交流は得るもの大きい。学年団を超えていろいろな同僚からそうしたアイデアをもらえること、先輩から語られる子どもの見方に触れることなど、いろいろなところで学ぶところがある。そうした機会を大事にし、「ひびき合い」